

第23回 壬生寺界限

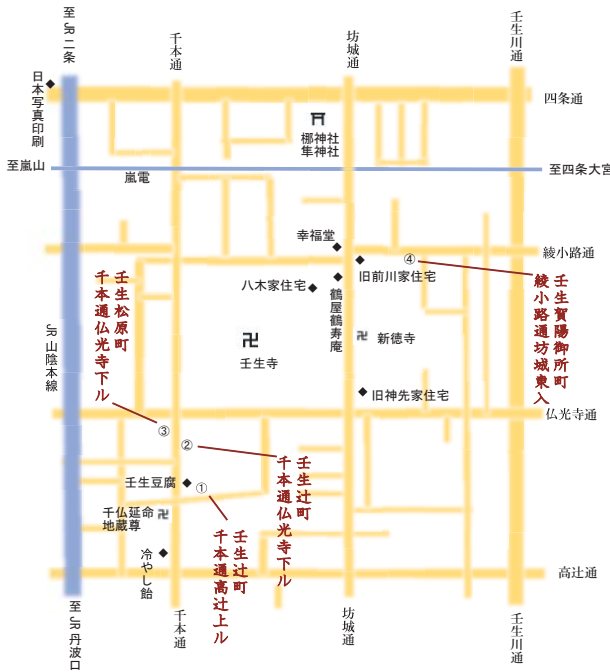
■ 千本通を歩く

今回は、第22回の北側の地域をめぐることにしましょう。第22回の光徳公園の脇の千本通を北上します。

千本高辻の十字路の少し北、西側に懐かしい「特製生が入りひやしあめ」。取材のときは暑いさなかだったので、喉を潤すために、買って飲みました。さらに少し行くと、東面して「千仏延命地藏尊」の祠があります。「千仏」は千本仏光寺の略と思われる。写真でもわかるように、壁に掲示板、傍らに椅子がおいであり、町内の集会所という雰囲気です。

この祠の斜向いには「壬生豆腐」の看板を掲げた早川商店（できたて豆乳一杯五〇円！）がありますが、その南壁、東へ向かうの路地（千仏延命地藏尊の写真に写っている北側の路地の続き）のところに、町名看板「壬生辻町千本通高辻上ル」①が掲げてあります。狭い路地の中で、しかも高いところに貼つてあるので、写真が撮りにくい。すこし北に、もう一枚。階下がガレージになった住宅の二階部分に、町名看板「壬生辻町千本通佛光寺下ル」②があります。町名は、同じ「壬生辻町」。町名に含まれる「町」は、「ちよう」と読むのが普通ですが、ここでは「まち」と読むらしい。同じような訓読みは、この近辺では「壬生森町」が

町名看板の所在（壬生寺界限）





千仏延命地藏尊

あります。二枚の町名看板は、「下京区」となっていますが、「壬生辻町」は現在中京区です。

さらに北上したところ、西側に町名看板「壬生松原町千本通佛光寺下ル」③が見つかりました。このあたりまでは、商店が混在する住宅街です。

この「壬生松原町」の看板は、「中京区」のように見えますが、仔細にみると、もともと「下京区」と書いてあったものを、あとから手を加えたことがわかります。

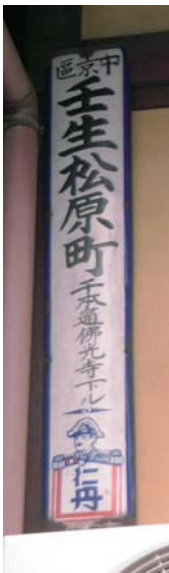
仏光寺通との十字路をすぎて、さらに北上すると、商店がほとんどなくなり、古い建物が多いので、町名看板の出現を期待したのですが、見つけることはできませんでした。右手、駐車



みぶつじまち 千本通 高辻 上ル ①



みぶつじまち 千本通 佛光寺 下ル ②



みぶつじまち 壬生松原町 千本通 佛光寺 下ル ③

場越しに、壬生寺の屋根が見え、さらには壬生寺境内にあるウェルエイジみぶ（有料老人ホーム）の巨大な建物がみえます。綾小路の変則的な交差点をすぎ、嵐電の高架を潜ると、四条通にでます。潜ったところで嵐電の高架の写真を一枚。



嵐電の千本通高架

■ 壬生寺

千本通を千本通と仏光寺通の交差点まで戻って、今度は、仏光寺通を東へ辿ってみましょう。ほどなく、「壬生延命地藏尊」の石柱が建った壬生寺の南門に着きます。写真でわかるように、堀越しに巨大な千体仏塔が見えます。見ての通り、石仏を円錐形のパゴダ風に安置したものです。これらの石仏は、区画整理が明治

時代のおこなわれた際に、京都市の各所から集められたもので、平成元年（一九八八）に現在の千体仏塔としたものです。



壬生延命地藏尊（壬生寺）南門と千体仏塔

『都名所図会』巻二には、次のような説明が載っています。

壬生寺は五條坊門朱雀の東にあり。宗旨は眞言律にして、和州招提寺に屬す。本尊地藏菩薩は坐像、長三尺にして、定朝の作なり。當寺の草創は、一條院御宇正曆二年にして、開基は三井寺の快賢大僧都なり。姓は藤氏にて、粟田關白道兼の支族なり。智證大師に隨身して、天台の奥義を究む。永承十六年十一月十六日寂す。

五條坊門は、現在の仏光寺通のこと。朱雀は、この振りがなのように読んで、現在の千本通りのこと。したがって、今風にいえば、壬生寺の所在地は、「仏光寺通千本東入」ということになります。この説明のあと、本尊の地藏菩薩の錫杖（平安中期、重要

文化財、京都国立博物館に寄託) についての不思議が紹介されています。昭和三七年(一九六二)に本堂が全焼した際に、本尊の地藏菩薩も焼失。本堂は、昭和四五年(一九七〇)に再建。



壬生寺表門

壬生寺本堂

『山城名跡巡行志』巻一の「壬生寺」の項には、次の記載があります。

壬生寺 宝幢三。味院。在綾小路ノ南坊城ノ西、眞言律 属三和州。招提寺。
門二所 一在坊城通一東向。二在五條坊門一南向。本堂 南。本尊地藏 定朝作。

『山城名跡巡行志』、僧浄慧、宝暦四年(二七五四年)

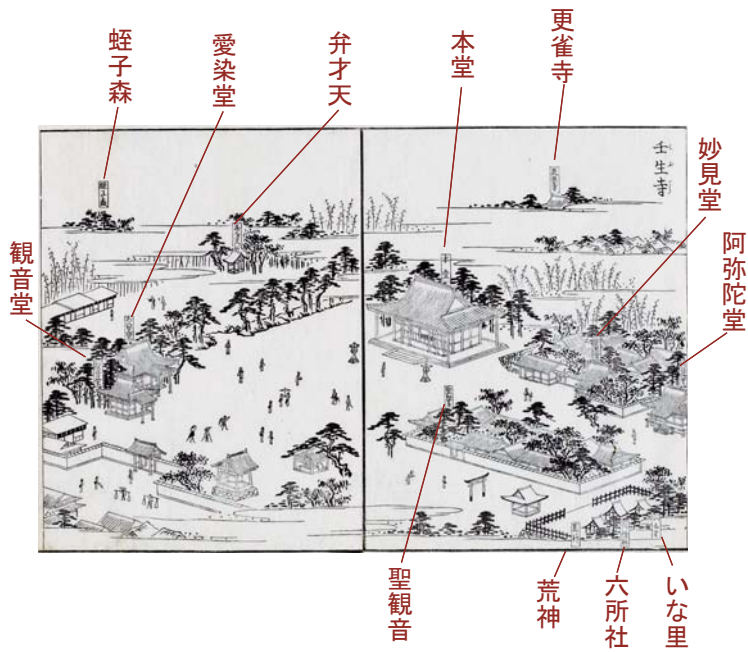
『新修京都叢書第十卷 山城名跡巡行志・京町鑑』光彩社、一九六八

(書き下し文)

壬生寺 みぶでら(宝幢三味院) ほしやうさんまいいん。綾小路の南、坊城の西に在り。
眞言律(和州、招提寺に属す)。門、二所(一は、坊城通に在り。東向。一は、五條坊門に在り。南向)。本堂は、南向。本尊は、地藏(定朝作)。

『都名所図会』巻二の壬生寺の鳥瞰図は、四条通大宮の西にあつた更雀寺の位置から考えて、東南から西北方向を見た図と考えられます(更雀寺は、昭和五二年(一九七七)に岩倉に移転)。左手に描かれている門は、仏光寺通に面する南門ですので、『山城名跡巡行志』の説明にほぼ一致します。現在は、記載のある二箇所の門と、北門があります。本堂が南向きであることが、現在の本堂(東向き)とは異なっています。『山城名跡巡行志』の記述では、続いて「子院六字」とありますが、右手に鳥状に固まっている建物がそれにあたるのでしよう。現在は、そのうちの「中院」(中之坊、文政二年(一八二九)再建)だけが残っています。ここには、十一面観世音菩薩が祭られ、洛陽三三所観音巡礼第二八番札所になっています。中院の建物の背後南側には壬生老人ホーム(壬生寺表門の写真の左手に写っている三階建の建物)があり、広い境内を利用した多角経営は、現世指向。中院の向かいには、阿弥陀堂が平成一四年(二〇〇二)に再建されていて、地階が壬生寺歴史資料館になっています。この奥に、壬生塚があり、そこに新選組隊士の墓があります。NHKの大河ドラマ「新選組」(二〇〇四年)以来、訪ねる人が増えたようです。また、柿本人麿の灰塚とつたわる人丸塚があります。碑は大正年間の建立とありますから、もしかしたら『山城名跡巡行志』第一に「在」

図 『都名所図会』巻二（安永九年（一七八〇）壬生寺の
（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」
より引用）



坊城通ノ西、高辻ノ南。由来不_レ知_ル。（坊城通の西、高辻の南に在り。由来、知らず）と説明してある「人丸塚」を移したのかもしれないとも推測しましたが、竹村俊則『新撰京都名所図会』（二九六二）巻四には、「人丸塚は、壬生寺の南、坊城通高辻下ル西側（壬生辻町）の某染色工場の中にある」としているので、どうもそうではないようです（某染色工場も今はなく、更地になっています）。壬生寺のこの部分は、若干観光寺院化してきて料金が必要ですが、まだまだ境内を自由に歩けます。壬生寺は、地藏尊を本尊とするだけあって、水掛地藏（水を掛けて祈ると願いが一つ叶う）、夜泣き地藏（幼児の夜泣き止め）などの御利益のある地藏が境内に祭られています。



中院（洛陽観音二八番札所） 一夜天神

坊城通に東面する表門をはいって、右手にあるお堂は、一夜天神。嘉永五年（一八五二）の再建。両脇に金比羅大権現（右）、六

所明神（左、壬生寺の鎮守）が祀られています。「一夜天神」は、『拾遺都名所図会』巻一に、「壬生寺の門前、民家の間にあり。北野一夜松の霊を勧請しけるなり」と紹介されています。一夜松神社は北野神社の末社で、「一夜に千本の松が生えるところに祀れ」という菅原道真のお告げによるもの。六所明神は、引用した鳥瞰図にも、「六所社」として描かれています。また鳥瞰図「六所社」の隣にある「いな里」は、現在は北門の西側にある「三福川稲荷堂」のことでしょう。「三福川」は「壬生川」をめでたく言い換えたもの。鳥瞰図の左上方にある「蛭子森」というのは、『山城名跡巡行志』第一に載っている「夷ノ社」のことと考えられます。説明には、「有_リ四_ニ條_ニ朱_ニ雀_ノ西_ニ二_丁二_森夷_古へ高明親王ノ第址」(四條朱雀の西二丁(夷森)に有り。古へ、高明親王の第址)とあります。表記は違いますが、所在地の割書が「夷森」と記載されています。

■ 太平記に出てくる壬生地蔵尊——綱目地蔵

壬生地蔵尊は、「綱目地蔵」と呼ばれました。この名の由来は、『太平記』巻第二四にある「三宅・荻野謀叛事 付 壬生地蔵事」の記述に基づいています。

まず、本編「三宅・荻野謀叛事」の要約。

時は南北朝時代、備前国の住人三宅三郎高德と丹波国の住人荻野彦六朝忠は相図って、上野国にいた新田左衛門佐義治を擁立して謀反の手はずを整えました、

ことは室町將軍側に露見してしまいました。追討の兵に攻められて、荻野朝忠は降伏。残った三宅高德は、新田義治をともなつて、海上より京へのぼり、室町將軍側の人々を夜討にしようとしてたくらみました。兵を集めるため廻文を諸国に遣すと、身をかくしていた南朝方の兵千余人が集まりましたので、目立たないように四手に分けて隠し、夜討の決行を待ちました。そのうち一手は、四條壬生。夜討の手引のために究竟の忍びどもを隠しました。決行前日に企てが漏れて、時の所司代都筑入道が、ここを攻めました。忍びどもの奮戦も及ばず、敗れてしまいました。これを聞いて、謀反の陣営は散々になりました。三宅高德は、新田義治とともに信濃国へ落ちてゆきました。

続いて、「付 壬生地蔵事」です。壬生に分宿していたものは皆討死したのですが、その中で香勾高遠というものがただ一人、壬生地蔵尊の加護により生き延びました。日本文学電子図書館(J-TEXTS, <http://www.j-texts.com/>)に太平記(国民文庫)の本文がありますので、引用しましょう(振りがなの一部、訓点を追加)。

さても此日壬生の在家に隠れ居たる謀反人共、無_レ被_レ遁_レ処_ニ皆_レ討_レれる中に、武蔵国住人に、香勾新左衛門高遠と云ける者只一人、地藏菩薩の命に替らせ給ひけるに依て、死を遁れけるこそ不思議なれ。

『太平記』巻第二十四、国民文庫

J-TEXTS <http://www.j-texts.com/fanhei/tk24.html>

(現代語訳)

なにはさておき、この日壬生の民家に隠れていた謀反人たちは、逃げ込むところがなく皆討たれたのに、武蔵の国の住人、香勾新左衛門高遠というものがただひとり、地蔵菩薩がその命と引き替えになさったことによつて、死から逃れることができたのは、実に不思議なことであつた。

その仔細は次の通りです。

高遠は、所司代の兵の囲みを破つて、壬生地蔵堂の中へ走り込みます。どこかに隠れるところはないかと探すうちに、寺僧とおもわれる法師が堂から出てきて、「そのような姿をしていれば、すぐにみつかる。この念珠と太刀を取り替えましょう」というので、法師のいうがままに従います。追手が四・五十人、堂の庭に走り込んで、門を閉め、くまなくさがしまわります。高遠は、念珠をつまぐりながら、「以大神通方便力、勿令墮在諸悪趣。」と高らかに啓白(お経を始めるために唱えること)し、日頃念じているお経を唱えておりました。追手は、単なる参詣人と考えて見逃し、ほかを探しまわります。仏壇の内、天井の上まで探した挙げ句、堂の傍らで血のついた太刀をもった法師を見つけます。「すはや此にこそ落人

は有けれ。」と、この法師を三人がかりで取り押さえ、高手小手に縛つて、侍所へ引き渡します。この召人を受け取つた所司代都筑入道は、そのまま牢に入れます。翌日、守手も牢から目をはなさず、戸も開いていないのに、牢の中はもぬけの空です。召人が座つていたところには、よい香りが残つていて、ちようど「牛頭旃檀の薫」のようです。法師を捕らえた三人の者の左右の手、鎧の袖や草摺までよい香りが染みこんでとれません。この不思議に、地蔵堂に調べにゆかせますと、地蔵尊の体の所々に、鞭のあとがあり黒ずんでいて痛々しい有様。そのうえ、高手小手に縛つた縄の切れ端が残つています。捕らえた法師が地蔵尊の化身と悟つた三人は、泣いて許しを乞い、本鳥(髻)を切つて出家しました。「彼は依順縁今生に助命、是は依逆縁来生の得値一遇一事」(地蔵菩薩に帰依することによつて今の世に命を助けられることもあるし、一方、地蔵菩薩に背いたために、これを悔い改めることによつて、かえつて来世で地蔵菩薩のご加護をえることもある)は、如来が説いてきたありがたいお言葉。これにたがわず、香勾高遠は順縁で、法師を捕らえた三人は逆縁で、いずれも仏の道に入りました。

身代わりに捕らえられたときの繩目が残つていたために、これよりのち、壬生地蔵尊は「繩目地蔵」と呼ばれ、洛陽四十八願所地蔵尊の第一番にあげられて、広くあがめられるようになります。

た。本来の地藏菩薩は半跏像はんかざうでしたが、昭和三七年（一九六二）に本堂が全焼した際に、残念ながら類焼してしまいました。現在の本尊は、律宗総本山唐招提寺の延命地藏菩薩立像を移したもので、重要文化財。

ちなみに、牛頭施檀ごづせんたんとは、インドの摩羅耶山まらや（牛頭山）に産する旃檀しんたん（白檀、香木の一種）。高遠が誦よみえている経文は、『地藏菩薩本願功德経じざうぼんがんくどくきふきょう』の一節で、世尊が地藏菩薩に託した言葉です。ただし、方便力は方便度（方便の心・度量）となつています。訓点文と書き下し文を示しておきましょう。「諸悪趣しよあくしゆ」は「もろもろの悪業あくぎやうの報いによつて落ちる迷いの世界」のこと。

（訓点文）
 以もつ二大おほい 神通方とんつうほう 方便力ちふんりやく、 勿なから 令しめ 墮おち 在ざい 諸悪しよあく 趣しゆ。

（書き下し文）
 大いなる神通と方便の力をもつて、諸悪趣に墮ち在せしめることなかれ。

■ 壬生狂言

本堂の向かつて右手に壬生寺保育園。その二階は、多目的ホールと壬生狂言の観覧席になつています。観覧席の北側には、大念仏堂（重要文化財、安政三年（二八五六）再建）があり、ここで壬生狂言が上演されます。「壬生のカンデンデン」と呼びなら

わされている、重要無形民俗文化財の無言劇です。カンわんは鰐わに口の音、デンデンは太鼓の音で、これらに笛が加わつた囃子がゆつたりと奏されるだけで、演者は終始無言。『都名所図会』には、「大念仏だいにんぼつ、圓えん覧らん上人じやうじんより始る。毎年三月十四日より二十四日に至る。種々しゆづの猿さる楽がくをなす。是を壬生みぶの狂言きやうげんといふ。」と説明されています。円覚上人（一二三三〜一三二一）は、壬生寺中興の祖。正安二年（一三〇〇）に大念仏会を始め、このときに無言劇で仏の教えを説いたと伝えられています。

『都名所図会』巻二には、「あたごまいりの壬生狂言」の挿絵があるので、引用しましょう（右図）。その説明には、当時の演目が列挙してあります。

むかしより定まる狂言の数廿五番あり。桶をけとり（*）、花盗人（*）、紅葉狩（*）、猿さる、愛宕詣り（*）、狐きつねつり、ほうろくワリ（*）、鶴つる（*）、頼光山入、盲人川渡、節分（*）、花見、猿引、焰魔角力、餓鬼責、曾我（*）、さいのかはら（*）、棒しばり、性悪坊主、熊坂（*）、羅生門（*）、湯立（*）、あふひのうへ、男伊達、棒ぼうふり（*）

ただし、*印は現在の演目にも名前があるものですが、*印以外がどの演目に当たるかは、調べが足りずわかりません。ちなみに現在の演目は三〇番に増えていて、愛宕詣り、安達が原、大江山、大原女、桶取、餓鬼角力、蟹殿、熊坂、賽の河原、酒蔵金蔵、節分、大仏供養、大黒狩、玉藻前、土蜘蛛、道成寺、鶴、橋弁慶、花折、花盗人、舟弁慶、炮烙割、堀川御所、本能寺、棒振、紅葉



『都名所図会』巻二（安永九年（一七八〇））壬生狂言の図。

（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

狩、山端とろろ、湯立、夜討曾我、羅生門。可能性があるのは、「狐つり」が、狐つながりて、現在の演目の「玉藻前」と関係があるのかもしれない。また、「頼光山入」は、源頼光の酒呑童子退治の一場面ですから、多分現在の演目「大江山」のことでしょう。「焰魔角力」は、現在の「餓鬼角力」に相当するのかもしれませんが。なお、『都名所図会』「あたごまいりの壬生狂言」の挿絵にある「ほうろくワリ」の「ろ」の字は、他のところにあられる「ら」の字とは筆の入りところが異なっているので、当時は「ほうろく」と読んでいたと推定されます。現在の壬生狂言では「ほうらくわり」と読んでいます。

引用した挿絵（右図）の「愛宕詣り」では、愛宕山に詣でた金持ちの大臣が、帰りに茶屋に寄って土器投げを楽しみます（演目では煎餅を投げ、これを食べると厄除けになるといわれています）。茶屋で休んでいる親娘連れの娘に一目惚れ。引用した挿絵は、小者がなんとか話をつけて、母親を引き離れた場面。豪華な被りもの（現在の演目では、目深に被った笠）の中には、おかめの面がかすかに見えます。大臣が被りものをとると、予想に反して二目と見られぬ容貌。最後には、大臣は逃げだし、娘が追いかけるという筋。

もう一つ引用した「桶とり」の挿絵（左図）の中には、

壬生の大念佛中興の開山圓覺上人よりはじまり、毎年三月十四日十日十夜本堂におゐて修行す。此會の中種々の狂言をなす事、愚癡豪味の輩、勝縁を結はじめて、菩提の道に入しめんがための方便なるべし。桶とりの狂言。

と説明されています。「狂言」の振りがなは、「狂言」が正しいように思いますが、何度見ても「けうげん」と見えるので、そのままにしておきます。

「桶とり」は、終わり方が特異。壬生寺の近くに住む娘は、器量はよいが生まれながらに指が三本しかないのです、来世は障碍のないようにと、毎日鬺伽を桶に汲んで、壬生寺本尊の延命地藏菩薩（更雀寺の雀森地藏、一名桶取地藏であるともいわれています）に祈願しておりました。鬺伽を汲むときは、地藏菩薩の種字（梵字の「カ」。壬生寺の御朱印をもらえば、本尊のかわりに押してある）を描くように汲むのが作法。この娘を大尽が見初めて口説きます。娘も折れて踊りを教え、二人で踊っていると、身重な本妻が見付けてしまいます。引用した挿絵（左図）は、この場面。すつたもんだの末、大尽は妻を捨てて娘を追います。残された醜女の本妻は、鏡をみながら化粧をしますがどうにもならず、自分の容姿を悲しんだ末に泣き崩れます。ここまでは、「桶とり」の粗筋。このままでは、本妻がいかにも可哀想。実は、本妻が狂死したあと、大尽が出家して菩提を弔うという後日談を、言外に残して終わっているのです。この狂言は終わり方が特異なだけに、言外の宗教性をいろいろと想像するという仕掛けになっています。

■ 壬生寺節分祭と焙烙割

壬生寺の節分祭は、京都では吉田神社の節分祭と並んで有名です。ちようと、壬生寺が裏鬼門、吉田神社が表鬼門にあたります。節分（二月上旬）には、壬生狂言の「節分」が上演されます。この時分の京都は寒く、観覧席は野外なので、しっかりと防寒が必要です。



壬生狂言「焙烙割」

この節分祭では、焙烙（関西では、普通「ほうらく」と読んでいます）に、家族の名前と年齢・性別を書いて奉納します。焙烙は沿道の露店で売っていて、奉納するところは別のところですが、別々に支払いが必要です。念のため。奉納した焙烙は、四月の公演のときの演目「焙烙割」で使われます。これで、家族全員の厄落としができるというわけです。

壬生大念仏会（壬生狂言春の公開）は、四月二日～二九日毎日五番程度上演。一番目は決まって「焙烙割」です。役人が「一

番に店を出したものの税金を免除する」という立札をだしたところ、まず羯鼓売（太鼓売）が一番乗りしたが、役人を待つうちに一眠り。その間に、焙烙売があらわれて、売り物の羯鼓と焙烙をすり替えてしまいます。羯鼓売が目覚まし、焙烙売と諍いになります。役人が戻ってきて、芸比べをさせ、芸達者な焙烙売に一番乗りを許します。焙烙売は、露台に見立てた舞台の手すりの端から端まで焙烙を積んでゆきます。腹のおさまらない羯鼓売は、並べた焙烙を次々に落として割ってしまいます。たくさん（千枚程度）の焙烙を次々に落として割るところが見せ場。二階の舞台から一階の土間まで落ちるので、土煙があがつて迫力があります。だれしも破壊願望が多少はあるもので、次々に割れる焙烙を見ていると爽快になります。二月の節分会に奉納された焙烙が十日間にわたって破壊されるので、単純に計算して一万枚。一家族五人として、五万人分の厄落としができることになりますね。

蕪村の句に、壬生狂言を詠んだものがあります。

永き日を云はでくるゝや壬生念仏 蕪村

与謝蕪村『蕪村自筆俳句帳』八一〇

尾形竹編著、筑摩書房、一九七四

蕪村の俳諧仲間の炭太祇（本シリーズ第18回参照）の句も載せておきましょう。

狂言は南無ともいわず壬生念仏 太祇
炭太祇『太祇句選後編』、吞獅選、安永六年（一七七七）
墨染のうしろすがたや壬生念佛 太祇

炭太祇『太祇句選』、吞獅選、明和九年（一七七二）

蕪村と太祇に和して、二月の節分会で壬生狂言を観たときの感想を、ひねりだしました。一時間近くも見物していると、身体が冷え切ってしまいます。

焙烙や去年と変らぬ名を書けり 艸蟲齋
春立つも尿こらへつゝ壬生念仏 艸蟲齋

■ 旧神先家住宅と八木家住宅

この近辺には、京都指定・登録文化財の建造物が二箇所あります。一軒目は、壬生寺表門の斜向い旧神先家住宅（中京区坊城通仏光寺上ル壬生賀陽御所町）。神先家は、壬生の郷土。母屋は、文政三年（一八二〇）の祈祷札が残ることから、このころの建築。現在は、「壬生武家屋敷黒竹家」として営業。

二軒目は、壬生寺の北隣にある八木家住宅（中京区坊城通綾小路下ル壬生柳ノ宮町）。母屋は文化六年（一八〇九）建築。長屋門などを備えた格式のある構成。幕末に新選組が分宿していた住宅で、文久三年（一八六三）、新選組の内紛の際に、芹沢鴨一派が暗殺されたところです。近藤勇一派は、何食わぬ顔で芹沢鴨らの葬儀をおこない、壬生寺に埋葬したと伝えられています。八木家の門前に「鶴屋鶴寿庵」。和菓子「屯所餅」。

『中興俳諧集』、鳥居清、山下一海校注
『古典俳文学大系』一三、集英社、一九七〇



旧神先家住宅

■ 新徳寺と屋根葺地蔵

旧神先家住宅の北の新徳寺（中京区坊城通仏光寺上ル壬生賀陽御所町）は、文久三年（一八六三）清河八郎が浪士隊の本部を置いたところ。この浪士隊の中から京都残留組が分かれ、新選組へとつながってゆきます。

新徳寺に祀られている地蔵尊は、屋根葺地蔵と呼ばれています。新徳寺は通常は拝観できませんが、門のところから内部を覗くと、「屋葺地蔵尊 万年寺」の石碑が建っていることがわかります。もともとは六角通猪熊にあった星光寺の像で、『星光寺



新徳寺



屋葺地蔵尊の碑

縁起絵巻』（室町時代、土佐光信筆、重要文化財、東京国立博物館蔵、ホームページから、絵と本文を画像として閲覧できます。
<http://www.tnm.go.jp/gallery/material/film/index.html>
 に、その像にまつわる霊験譚が述べられています。

建長年間（一二四九〜一二五六）の話。六角櫛笥に、筆売りの尼が住んでいました。貧しいながら、星光寺の地蔵尊に参ることを日課とし、今生後生の加護を頼みとしておりました。ある日、商売から帰ってみると、住居の屋根が吹き飛びとばされています。留守中ににわかにか風が吹いて屋根を吹き飛ばしたことに、尼は「お地蔵さまのご加護もあつたものではない」と不平をもらしまし

た。ところが、次の日に商売から帰ると、屋根は立派に葺き替えられています。隣の者に聞くと、どこからか法師が四、五人あらわれて、屋根をなおしたとのこと。尼は改めて地蔵尊の加護を感じ、熱心にお参りを続け、最後には地蔵尊のお迎えで極楽往生を遂げたといえます。この霊験譚により、星光寺の地蔵尊は、屋根葺地蔵と呼ばれて、朝野の崇拜を集めたと伝えられています。

この霊験譚がどのくらい広まっていたかという点、『山城名勝志』巻四の「矢田寺」の項に、六地蔵を列挙している文献が引用されており、次のように記載されています。

○親長卿記云、六ヶ所ノ壬生 西院號三高西寺一 蔵珠院讚州
八田 星光寺 清和院○白川資益王ノ記云、文明十四年
七月廿四日、参三六地蔵、所謂 西院高西寺 壬生 八田
屋禰葺星光寺乎 清和院 正親町西洞院讚州陣蔵珠院

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年（一七〇五）
『改定史籍集覽』二二巻、近藤瓶城編、臨川書店、一九八四
新加通記類第一八

引用されている日記は、それぞれ甘露寺親長（ちみなが 応永三二年（一四二五））と白川資益王（すけ 応永二四年（一四一七））と文明十六年（一四八四）によるもので、室町中期の重要な史料です。「文明十四年」は、一四八二年。このころに、六地蔵めぐりがおこなわれていて、その中に「星光寺の屋禰葺」がはいっていることがわかります。この像は、江戸時代に万年寺



旧前川邸

を経て、新徳寺に客仏として祀られるようになったと伝えられています。ただし、『星光寺縁起絵巻』に述べられているのは石仏で、現在は木像なので、その霊験を伝えるために江戸時代に作り直したものでしょう。

新徳寺の北は、旧前川邸（綾小路坊城東南角壬生賀陽御所町）。現在は、田野製袋所が所有。新選組が文久三年（一八六三）〜元治二年（一八六五）まで、壬生屯所とした住宅です。綾小路坊城西北角には、和菓子屋「幸福堂」。「きんつば」。

■ 元祇園柳神社

旧前川邸から綾小路通を東へゆきますと、南側の民家二階に、町名看板「壬生賀陽御所町綾小路通坊城東入」④が掲げてあります。看板には「下京區」とありますが、壬生賀陽御所町は、現在では中京区に変わっています。



壬生賀陽御所町

綾小路通 坊城東入④

町名にある「賀陽御所」は、何に由来するのでしょうか。『山城名勝志』巻四には、嘉陽門院の御所が四条壬生にあつたことが、『明月記』（藤原定家の日記）を引用する形で記されています。

嘉陽門院御所

明月記云、嘉禄二年六月十三日、今夜依祇園御靈會、行幸四條壬生嘉陽門院ノ御所、

（書き下し文）

嘉陽門院御所
 明月記に云はく、嘉禄二年六月十三日、今夜、祇園御靈會に依りて、四條壬生、嘉陽門院の御所に行幸す。



嵐電の坊城通の踏切

嘉陽門院礼子内親王（正治二年（一一二〇）〜文永十年（一一二七））は、後鳥羽天皇の第二皇女。賀茂斎院となったが病のため退出。承久の変（承久三年（一一二一年））で、父後鳥羽上皇が隠岐に流されたあとも（母の坊門局は隠岐へ同行）、京都にとどまって、七三歳まで長生きしました。明月記の日付、嘉禄二年（一一二六）は、後堀河天皇の在位の時。祇園御靈會に際して、後堀河天皇（嘉陽門院のいとこにあたり、このとき一四歳）が嘉陽門院御所に行幸したという内容です。この嘉陽門院御所が、町名「壬生賀陽御所町」の由来です。

坊城通（壬生寺通）を更に北上すると、嵐電の踏切。この踏切を渡ったときに、電車が来ましたので、写真を一枚。写真右手の石造りの玉垣は、柳神社のもの。



元祇園柳神社（東門）



北門

ほどなく、柳神社（中京区壬生柳ノ宮町）の西門に着きます。社殿の向き（東面）から考えてこちらが多分、表門。四条通にまわると、北門があります。

四条通に面した北門には、京都市による駒札が立っています。詳しいので、引用しましょう。

柳神社（元祇園社）

素戔鳴尊を主神とし、宇賀御魂命、伊弉冉命、菅田別尊などを配祀する。

貞観十一年（八七六）京都に疫病が流行したとき、牛頭天王（素戔鳴尊）の神霊を播磨国広峰から勧請して鎮疫祭を行ったが、このときその神輿を柳の林中に置いて祀ったことがこの神社の始まりであるという。後に神

霊を八坂（今の八坂神社）に遷祀したとき当地の住人は花を飾った風流傘を立て、鈴を振り、音楽を奏して神輿を八坂に送った。これがのちの祇園会の起源といわれる。また、当社は八坂神社の古址にあたるので元祇園社と呼ばれる。維新の頃は田圃の中の一小祠であったが、明治七年（一八七四）と昭和四年（一九二九）の復興を経て現在に至った。

境内の隼神社は延喜の制度の大社で、大正七年（一九一八）蛸薬師坊城からこの地に移祀された。柳神社とともに厄除け、疫病払いの神である。

明月記の嘉祿二年（一二二六）六月十三日の記事「祇園御霊会」とき後堀河天皇が嘉陽門院御所に「行幸」は、当時は祇園社がこの地にあつたために、近くの嘉陽門院御所に赴いて祇園御霊会を樂しんだ（あるいは祭事に関係した）のかもしれない。

元祇園柳神社の氏子社中は、三条通（北）、松原通（南）、壬生川通（東）、西土居通（西）に囲まれた広い地域で、五月の例祭のときは、四条通の門前から、JR山陰本線の高架をすぎて、日本写真印刷の辺りまで露店が並びます。神幸祭の祭列には、剣鉾（日月鉾、龍鉾、鳳凰鉾、朱雀鉾、虎鉾、菊鉾）、花傘、獅子舞、少年勤王隊などが巡幸します。

柳神社の境内には、柳神社の社殿に並んで、隼神社の社殿が建っています。もともとは、蛸薬師坊城にあつた延喜式内社。旧地には、碑が立っています。隼神社については、旧地をめぐるときに紹介しましょう。



隼神社

■ 椰と水葱

椰神社のある地域は、壬生椰ノ宮町と呼ばれています。この地名の由来に関して、『拾遺都名所図会』巻一には、次の説明が載っています。

水葱宮、四條の西、千本の東南の方、圃の中にあり。老杉一株の本に小祠を建つる。土人牛頭天王地主神といふ。大内裏の御時、此所は水葱町にして、一叢の森あり。或京程の圖に水葱町は朱雀通の東、四條の南、坊城の西、綾小路の北と云々。

『山城名勝志』巻四では、項目名は「水葱町」となっていて、「森の中に小祠があり、土地の人は、水葱の宮と呼んでいる」と説明しています。

水葱町ナギ（或京程、在朱雀ノ東、四條ノ南、坊城ノ西、綾ノ小路ノ北、按、今此所有レ森、々ノ中有「小祠」、土人言「之水葱ノ宮」、是水葱町之舊跡歟、

（書き下し文）

水葱町（或る京程、朱雀の東、四條の南、坊城の西、綾小路の北に在り。按ずるに、今此の所、森有り。森の中に小祠有り。土人、之を水葱の宮と言う。是れ、水葱町の舊跡か）。

一方、『山城名跡巡行記』第一では、「水葱ノ神祠」の項を立て、「在四條壬生拾芥抄水葱町」と説明していますので、水葱宮や水葱町に関する出典が『拾芥抄』らしいことがわかります。

ちなみに、椰は、楨科の常緑高木。これに対して、水葱は、水葵の古名。すでに『万葉集』に詠われています。

長居吉麿

醬酢ひしほすに蒜搗き合せて鯛願ふ

われにな見せそ水葱の羹あづもの

『万葉集』一六卷三八二九

「水葱の羹」は、水葱の若葉の吸い物。今では、水葱は絶滅危惧種になっていますが、古くは栽培しており若葉を食用にしていた。

さらには、『催馬楽』に「田中」という曲があり、その中に田水葱が読み込まれています。

田中

田中の井戸に 光れる田水葱 摘め摘め 吾子女
小吾子女 たたりらり 田中の小吾子女

『催馬楽』（八五〇年ころ成立）

日本古典文学全集二五巻、『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』

白田甚五郎、新聞進一校注・訳、小学館、一九七六

「光れる田水葱」は、「比可礼留太奈支」と表記されています。ついでに、清少納言の『枕草子』第二六六段は神尽くしですが、その中に「水葱の花の御輿」という記述があります。

神は松の尾。八幡、この国の御門にておはしましけむこそ、いとめでたけれ。行幸などに、なぎの花の御輿に奉るなど、いとめでたし。大原野。つみて。池は鴛鴦などいとをかし。賀茂はさらなり。稲荷。春日いとめでたくおぼえさせたまふ。佐保殿などいふ名さへをかし。

(後略)

『枕草子』、清少納言

『日本古典文学体系』一一巻、松尾聰、永井和子校注・訳、小学館、一九七四

「水葱の花の御輿」とは、葱花輦のことで、屋形の頂に（水）葱の花の形をした金色の玉（擬宝珠）を据えた輿。天皇が行幸の際に用いる乗り物。水葱が水葵のことなら、花は擬宝珠（いわゆる葱坊主）の形にはならないと思うのですが。

■ 綾小路と錦小路

ところで、水葱といえは、『宇治拾遺物語』巻第二の中に「清徳聖、奇特の事」というおもしろい話があります。あらすじを紹介しましょう。

清徳聖が亡くなった母の供養に三年間愛宕山に籠ったあと、西の京を通りがかります。畑に水葱が生えているのを見て、修行あけの空腹に耐え切れず、道すがら水葱を折って食べておりました。高貴な聖がガツガツと食べているその光景を畑の持ち主がみて、「欲しいなら欲しいだけ召し上がれ」というと、聖は三町（約三・三ヘクタール）に植わっていた水葱を全部平らげてしまいました。さらに白米一石を炊いて出すと、これもみな食べて行つてしまいました。畑の持ち主はあきれて、この話をまわりに吹聴したところ、坊城の右の大殿（藤原師輔、延喜八年〔九〇八〕〜天徳四年〔九六〇〕）の耳にはいり、「結縁のために物まいらせてみん」と聖を呼びます。ほかの人々には聖一人しか見えませんが、師輔には、聖のうしろについてきた餓鬼、畜生、虎、狼、犬、鳥、数万の鳥獸が見えます。「やつぱり立派な聖だ。めでたい」と、白米十石を炊いて食わせると、ついてきた百鬼夜行が集まって食べてしまい、聖は食べずに喜んで出てゆきます。師輔以外の人には聖一人が食べているようにみえますが、師輔は「やつぱりただの人ではない。仏が化身したものは」と感心します。

ここから、『宇治拾遺物語』では、錦小路がかって「屎小路」と呼ばれていたことの由来を、でつちあげています。上述の大食い話に結び付けて、通りの名前が「屎小路」である由来を、もつともらしく次のように記しています。

さて出でて行く程に、四条の北なる小路に穢土をま
る。この尻に具したる者し散らしたれば、ただ墨のや
うに黒き穢土を隙もなく遙々とし散らしたれば、下種な
どもきたながりて、その小路を糞の小路とつけたりけ
るを、

『宇治拾遺物語』巻第二の一

(小林保治、増古和子校注訳『宇治拾遺物語』
新編日本古典全集50、小学館、一九九六)

(現代語訳)

そのあと、退出して歩いてゆく途中、四条の北の小路に、聖が糞をした。ということは、うしろに連らなっている百鬼夜行のものが、一緒になって、そこらじゅうに糞をしたことになる。墨のように黒い糞が隙間なくはるか向こうまで散らかったので、身分の低いものでさえ汚がつて、その小路を糞の小路と名付けた。それで、

この由来は、古くは「具足小路」が訛つて「屎小路」と呼ばれていたことをふまえています。実際、『拾芥抄』(鎌倉中期成立、<http://hdl.handle.net/2433/277>)では、小路を列挙した中

に、「屎小路」と記載されています。それにしても、「聖についてきた百鬼夜行の者どもが、揃つて糞をしたところが、一列に並んで通りになった」とは大仰な話ですね。もつとも、当時は公衆便所などはないので、実際に裏通りには「屎小路」になっている通りがあったのかもしれない。「穢土をまる」は「糞をする」と。動詞「まる」は、「おまる」(便器)として現在でも生きています。ついでに、余計なことですが、「踏ん張る」の語も「清徳聖が糞をまる」に結びつけられれば、語源譚になりそうな気がします。『宇治拾遺物語』では続いて、通りの名の改名譚。「綾」を出して、「錦」に繋げるのは、漫才の掛け合いの呼吸ですね。かくして、「屎小路」変じて「錦小路」となつたいきさつ。

帝聞かせ給へて、「その四条の南をば何といふ」といはせ給ひければ、「綾の小路となん申す」と申しければ、「さらばこれをば錦の小路といへかし。あまりきたなきなり」などと仰せられけるによりしてぞ錦の小路とはいひける。

(現代語訳)

天皇が屎小路の名前の由来をお聞きになつて、「その四条の南の通りを何と呼ぶか」とおっしゃつたので、「綾の小路と申します」と答えた。「それなら、四条の北にあるこの小路を錦の小路と呼びなさい。糞小路ではあまりに汚い」とおっしゃつたので、それよりのちは、錦の小路と呼ぶようになった。



聖徳寺

寺ソメイヨシノ」として、区民誇りの木（指定番号A-02）に選ばれています。

続いて、南面して、光縁寺。慶長一八年（一六一三）頃の創建。浄土宗で、知恩院の末寺。山南敬介をはじめとする新選組隊士二十余名の墓所です。

さらに、光林寺（北面）は、浄土宗西山禅林寺派。境内で光林保育園を経営しています。境内に洛陽四十八願所地藏尊第二番の水那土地蔵があるそうです。また、墓地には、本シリーズ第18回で紹介した炭太祇の墓がある旨の石碑が建っています。

石碑の文面は「太祇居士墓 四明翁句碑 當寺内に在り」。四明翁とは、中川四明



光縁寺



（嘉永二年（一八四九）〜大正六年（一九一七）のこと。正岡子規に師事した俳人。京都奉行所の与力であった人で、明治時代になってから、転身していろいろな方面で活躍しました。たいへん多能な人であったらしく、興味が湧いてきましたが、その業績を辿るのは別の機会にゆずります。句碑の句は、墓所の光林寺で炭太祇を偲んで詠んだもの。

同じ寺の土になる身と薪折で 四明

「薪折」は、かまどや囲炉裏などに薪を折っていくことと解釈しておきます。俳句の大意は、「親子として一緒に薪を折って囲炉裏にくべることはないが、同じ寺に葬られる身になりたいものだ」でしょうか。四明の葬儀は、光林寺で営まれましたが、



光林寺



炭太祇墓の碑



山陽先生瘞髮碑

墓は西院の高山寺にあります。この句に関連して、太祇の句を、次にあげておきましょう。

父と子よよき 櫓ぼたくべしうれし顔 太 祇

炭太祇『太祇句選』、吞獅選、明和九年（一七七二）

『中興俳諧集』、鳥居清、山下一海校注
『古典俳文学大系』一三、集英社、一九七〇

光林寺の山門右手には、光林保育園の看板と、傍らに「山陽先生瘞髮碑山内在り」と彫り込んだ石碑が建っています。かわいいキャラクターターの看板と、普段は使わない「瘞」のような難しい漢字を含んだ石碑。このアンバランスさには最初はびっくりしますが、ここが京都であることで、妙に納得してしまいます。瘞髮とは、髪を埋めること。頼山陽が生前に建てたといわれる遺髪塚が境内にあることを示しています。門前に保育園の柵があり、境内に入るのは遠慮しました。

光林寺の向かい、光縁寺の東隣は、法善寺（南面）、浄土宗。さらにその東隣は、西方寺（南面）、浄土宗。光林寺の東隣は、成道院（北面）、浄土宗。東へ少して、大宮通にでます。

■ 仏光寺通沿いの寺々

綾小路の一筋南の通り、仏光寺通沿いには、月輪寺、浄土宗。『拾遺都名所図会』巻一の説明には、「月輪寺 壬生寺の東三町計ぼかりにあり。浄土宗、知恩院に属す。古は月輪兼實公の別荘にして後寺となる。寺記紛失す。中興は唱臨和尚なり」とあります。藤原

兼実（久安五年（一一四九）〜承元元年（一二〇七））は、平安末期から鎌倉時代にかけて活躍し、日記「玉葉」を残しました。彼の月輪山荘は、東山泉涌寺近くであったといわれています。「月輪」は地名としても残っていて、泉涌寺の近くに京都市立月輪中学校があります。寺院の移動はよくあることなので、中興のときに移転した可能性があります。また、右京区清滝にも月輪寺がありますので、記述には混同があるのかもしれませんが。

帰命院（南面）、浄土宗。門碑は、「きみやう院」となっていました。『拾遺都名所図会』巻一では「開基は雄蓮社文譽上人。慶長年中の草創なり」と説明したあと、名高い「小児五香湯」を帰命の名にちなんで（どう繋がるのかももう一つわかりませんが）頒布していることを紹介しています。今はどうなのでしょう。

帰命院には、鳥羽石隠（元文四年（一七三九）〜文政六年（一八二三））の墓があります（『国書人名辞典』第三卷、岩波書店一九九六）。今日では世人の口にのぼることは少ないが、江戸時代の文人画家です。当時の人名録『平安人物志』（日文研データベース）の安政四年、天明二年、文化一〇年、文政五年の版に掲載されています。文化十年（一八一三）版（画の項）と文政五年（一八二二）版（文人画の項）には、次のように記載されています。

鳥羽希聰

字敬父号石隠又号
台麓高辻諏訪町

鳥羽萬七郎

寛政頃には京都画壇の重鎮となっていたようです。画家として活躍するだけでなく、硯の研究書『和漢研譜』（寛政七年（一七九五））や和漢書画の印を集めた書物『摺印補正』（享和二年（一八



帰命院

〇二二）、『摺印補遺』（文化七年（一八一〇）刊行）を刊行しています。

帰命院には、もう一人の画家、森徹山（安永四年（一七七五）〜天保一二年（一八四一））が葬られています。円山応挙の弟子。動物（猿、狸、鶴など）を好んで描きました。大阪で一派（森派）をなし、おおきな勢力を誇りました。養子に森寛斎、義子に森一鳳がいます。森寛斎は京都に住んで、勤王画家として活躍しましたので、のちの回に紹介することにしましょう。

婦命院の塀の東はずれに、町名看板「仏光寺通大宮西入坊門町」⑤。これはアリナミンがスポンサー名としたはいつています。傍らの告知用黒板が、古びていて味があつたので、ついでに写しておきました。

仏光寺通を大宮通に出たところ、少し南で、町名看板「大宮通 仏光寺下ル五坊大宮町」⑥を見つけました。この看板は普通の形式で、交差する通りの名称が先頭に大書してあり、町名を小さく書いてあります。町名看板①②④と比較してください。町名看板⑥に「下京区」とある通り、五坊大宮町は現在も下京区のままです。



大宮通 佛光寺下ル 五坊大宮町 ⑥



仏光寺通 大宮西入坊門町 ⑤



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第23回）2010/04/07

© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 <http://xyntex.com>